

平成15年度文部科学省初等中等教育局国際教育課委嘱研究  
「英語教育に関する研究」報告書

英語教員が備えておくべき英語力の目標値についての研究

第3研究グループ

リーダー	石田 雅近（清泉女子大学）
サブリーダー	緑川日出子（昭和女子大学）
	久村 研（田園調布学園大学短期大学部）
	酒井 志延（千葉商科大学）
	笹島 茂（埼玉医科大学）

平成16年3月26日

## 研究計画

### 研究の目的

「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」において、英語教員が備えておくべき英語力の目標値として、英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点程度が設定されている。この目標値に照らして、英語教員として求められている「英語力」と「英語教授力」との関係性を明らかにする。特に、「英語で授業を行なう」ために必要な「英語力」と「英語教授力」はどのような要素から成り立っているかについて、中学・高等学校で実践されている授業の参観と分析を行い、その構成要素を明らかにし、英語力をどのように授業に生かすべきかを重点的に研究する。

### 研究の内容及び方法

1. 英語教員が備えるべき「英語力」と「英語で授業を行なう力」に関する研究を行なう。

1) 平成14年度に「英検準1級合格の現職英語教員」を対象に実施したTOEFL(ITP)及びTOEIC(IP)の結果に基づいて、中学校及び高等学校教員約20名の授業参観により授業分析を行ない、教員の「教室における英語使用」の実態を調査する。特に、「英語を使っている授業」及び「英語を使っていない授業」について、教育段階、科目、英語使用領域、英語使用活動、授業内英語発話時間等を分析する。

2) 日本において「日常的に授業で英語を使っている」中学校及び高等学校教員約5名を特定し、授業参観により授業分析を行ない、その特性を明らかにする。特に、教員が英語を使っている場面、英語使用の方法、教材等を中心に検討する。

2. 1の研究と並行して、英語教員の「英語力」と「英語教授力」に関する国内外の先行研究資料を収集し、日本における英語教員が備えるべき資質・能力の基準を設定する可能性を探る。

# 目 次

研究結果概要

研究の背景

研究の目的

研究の方法

中学校に関する調査結果

高等学校に関する調査結果

調査結果のまとめ

今後の課題

補遺

## 研究結果概要

「授業で求められる資質・能力」の要件について、本調査によって以下の事項が判明した。

### 1. 『英語で効果的に授業を行うための「英語力」』の要件

#### (1) 中学校教科書指導の場合

- ・「目標値」以上の能力（能力試験で測れる英語力）
- ・ 授業で「教室英語」、「練習」、「導入」、「スモールトーク」を英語で行う能力，など

#### (2) 中学校の協同授業と高校OCでの協同授業の場合

- ・「目標値」以上の能力（能力試験で測れる英語力）
- ・ ALT から情報を引き出す力
- ・ ALT に生徒を訓練させる力
- ・ 平易な英語で言い換える力
- ・ ALT と協同でモデルを示す力
- ・ ALT と交渉をする力
- ・ ALT に指示をする力，など

### 2. 『英語で効果的に授業を行うための「英語教授力」』の要件

#### 中学校教科書指導の場合

- ・ 自己表現活動を指導する力
- ・ 絵などの補助教材を使って英語で説明する力
- ・ 生徒に本文などを暗記させるまで音読させる力，など

## 研究の背景

### 1. 平成 13 年度実施の「英語教員が備えるべき英語力」の全国調査結果について

「英語教員研修研究会」では、平成 13 年度の科研費研究の一環として、「英語力と研修等」について、全国 3001 校((中学校 1,891 校, 高等学校 1,110 校))の中学校, 高等学校の現職英語教員を対象として全国調査を実施した。その結果, 図 1 のように「英語教員が備えるべき英語力」として英検準 1 級を支持する者が過半数以上であった。

### 「望ましい英語力」調査結果(中・高別)

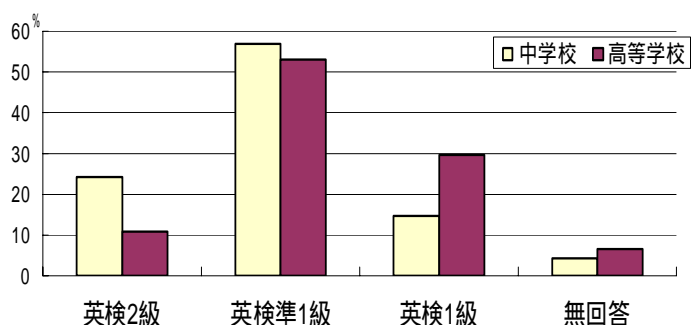


図 1 「望ましい英語力」調査結果(中・高別)

### 2. 平成 14 年度の文部科学省委嘱研究の概要について

平成 14 年 9 月には文部科学省初等中等教育局国際教育課から委嘱を受け、「英語教員が備えておくべき英語力の目標値についての研究」を行うこととなった。平成 14 年度の研究内容は、「中高の英語教員の英語力と教授力に関する実態調査」である。その目的は「英検準 1 級, TOEFL, TOEIC の目標値に関する調査」, 「教室内的英語使用活動についての調査」, 「英語教授力に関する調査」の 3 点である。

#### 1) 英検準 1 級, TOEFL, TOEIC の目標値に関する調査

##### 試験結果

過去 5 年間において, 英検準 1 級に合格した関東地区に居住する英語科現職教員 58

名（中学 21 名，高校 35 名，中高一貫校 2 名）に依頼し，平成 14 年度の冬季休業中に，TOEFL(ITP)と TOEIC(IP)の両方を受験してもらった。また，その試験結果は，TOEFL では最高 640，最低 467，また TOEIC では最高 965，最低 575 のスコアの幅があった。また，得点分布をみると，「TOEFL600 以上 - TOEIC810 以上」の領域に該当するのはわずか 5 名（8.6%）だけであった。

表 1 試験結果

TOEFL-TOEIC	人数	累計	累計%
600-810	5	5	8.62
550-730	14	19	32.76
530-720	13	32	55.17
515-710	10	42	72.41
500-700	6	48	82.76
467-575	10	58	100.00

平成 14 年 7 月に文部科学省が発表した目標値の領域「TOEFL550 以上 - TOEIC730 以上」に該当する者は 19 名（32.8%）であった。受験者の 80% 以上が入る領域を探してみると，「TOEFL 500 以上 - TOEIC 700 以上」であった。表 1 で示すように，英語教員に関しては，英検準 1 級合格に該当するスコアの領域は，「TOEFL 500 以上 - TOEIC700 以上」であると推定できる。

#### 比較調査結果

英検準 1 級合格の教員を被験者として実施した TOEFL，TOEIC の試験結果から，英検準 1 級合格者の中でも，TOEFL，TOEIC の得点に大きな幅があることがあることが判明した。関係各団体の協力を得て以下の資料を入手し，

英検：2 級，準 1 級，1 級問題（H15 年 1 月 26 日実施）

TOEFL：*Test Exercise Book*，

*Test Preparation Kit Workbook*

*Practice Tests Workbook Vol.1&2*

TOEIC：

『公式ガイド&問題集』vol.2 pp.150-177

高校教科書：

*The Crown English Reading(2003)*:三省堂

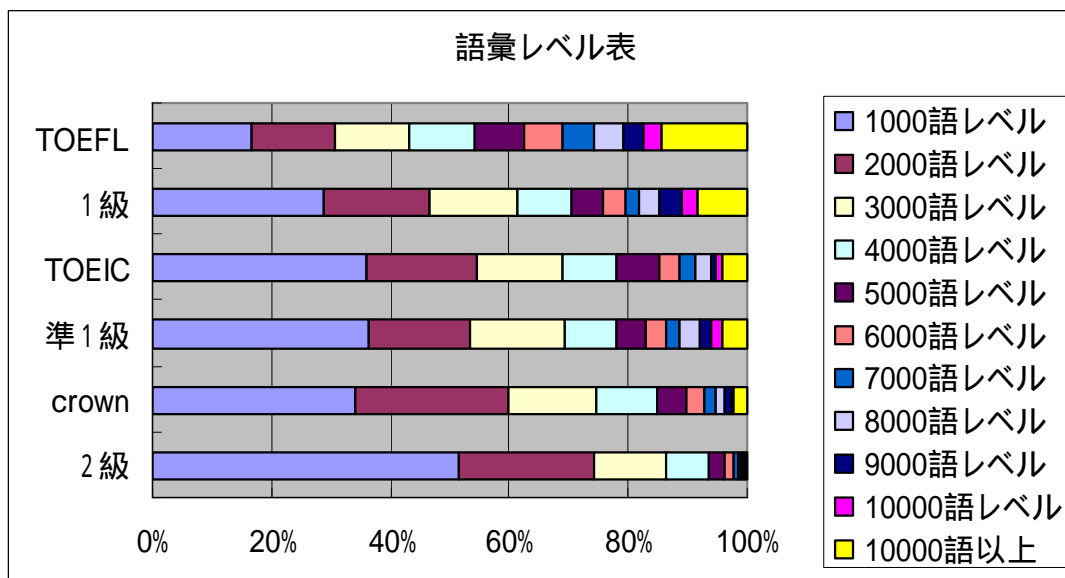


図2 語彙レベル表

分析した主な相違点は図2で示すとおりである。

語彙レベルの面では英検準1級とTOEICは、ほぼ同レベルの試験と考えられる。ただし、一万語レベル以上が英検準1級およびTOEICでは約4%であるのに対して、TOEFLでは、約14%である。

その他の主な相違点は以下の通りである。

- ・読解問題では、TOEICは他の2試験と比べ、短い文書を多数出題する。準1級が総語数において他の2試験と比べ若干多い。
- ・リスニングの試験時間に大きな差があることと併せ、3つの試験に共通しておかれている「会話」の一部および「モノローグ」の語数において、TOEFLの一つの課題文は、TOEICの約3～4倍、準1級の約1.5倍の長さがある。
- ・出題問題のトピックに関しては、TOEFLはアカデミックな話題に、TOEICはビジネス関係の話題にかなり比重が置かれている。英検準1級は特定な話題に偏る傾向はみられない。

以上のことから、英検、TOEFL、TOEICにはそれぞれの特性があり、教員から見れば、興味・関心・得意分野によってテストに対する適性が異なるであろう。したがって3種の能力試験はそれぞれ特質が異なるため、教員の備えるべき目標値としてこれらの試験を用いる場合は、各試験の特性を十全に理解することが望ましいことは明らかである。

## 2) アンケート及び聞き取り調査結果

英検準 1 級合格者で TOEEL ( ITP ) , TOEIC ( IP ) を受験した調査協力者全員に , 教室における英語使用に関する意識と英語力及び英語教授力に関する意見をアンケート・聞き取りによる調査を実施した。そして , 次のような結果が明らかになった。

#### 教室における英語使用の意識について

英語教員が授業で使っている英語使用を調べるために , 授業中に英語を使う活動を 7 領域 43 項目に設定した。表 2 の 43 項目の活動について 5 段階で自己申告してもらう形式をとった。

表 2 教室で英語を使う主な活動

教室英語	小テストを実施する
生徒を席につかせる	テストの解説をする
自分や黒板などを注目させる	前の授業を復習する
静かにさせる注意をする	導入
行為をしっかりと罰をあたえる	重要構文の導入する
生徒の活動や行為をほめる	新出語の導入する
生徒に大きな声を求める	レズントピックを導入する
生徒に感謝する	本文を導入する
生徒の誤りを訂正する	発音の指導をする
生徒の理解を確認する	教授
任意の参加を求める	内容把握の指導をする
指名して活動をさせる	教科書本文を要約する
授業中 , ALT に指示する	語句や文の意味を説明する
授業中 , ALT に依頼する	文をパラフレーズする
スモールトーク	文法を指導する
授業開始のあいさつをする	和文英訳を指導する
授業のはじめに曜日等を確認する	練習・その他の活動
出欠・遅刻の確認する	パターンプラクティスをする
欠席[遅刻]理由を聞く	コミュニケーション活動をする
生徒の健康チェックをする	ノート等を書く作業をさせる
天候について聞く	歌を指導する
前日等の話題・行動について聞く	ゲームを指導する
日常的な話題を提供する	まとめ
復習	授業をまとめる
宿題を確認する	次の授業の指示をする



図3は、英語教員の科目・担当別英語使用状況を表している。表2で示した7つの活動領域全てに英語を「よく使う」と回答すると7領域×4で、28点で満点となる。全てに「時々行う」は、21ポイントとなり、すべてに「あまり使わない」は14ポイントとなる。同じく、全てに「行わない」と回答すると7ポイントとなる。

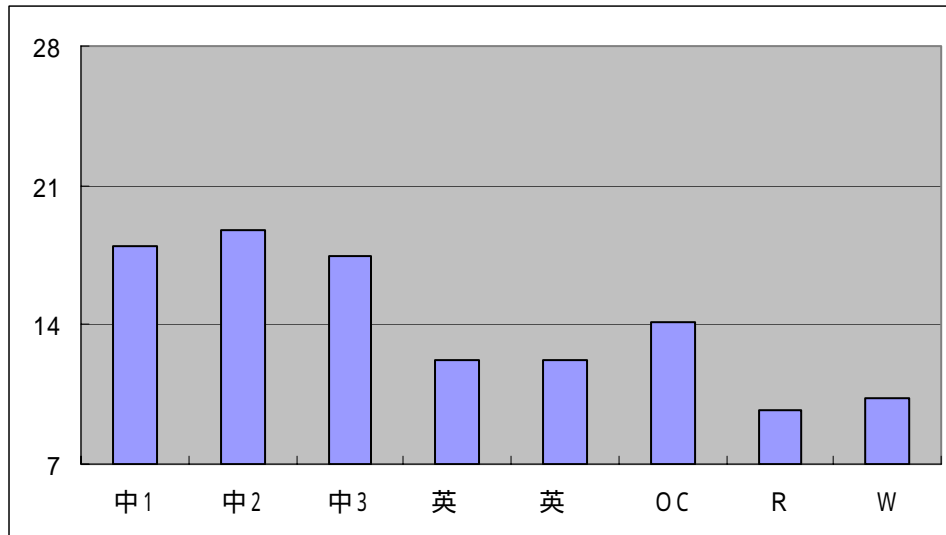


図3 科目・担当別英語使用状況

この自己申告表から判断する限り、「高校より、中学校の方が英語を使っている」、また、一番使われているのは「中学2年」である。しかし、7領域の活動・全部で「時々使う」と21ポイントなので、すべての科目・担当がそれを下回っているわけであるから、それほど「英語を使っている」とは答えていない。そして、高校では、「OC」の平均が14ポイントで「あまり使わない」のレベルであり、他の科目ではおしなべて、「英語がほとんど使われていない」という実状が推測できる。教室内の英語使用は、教育段階、学年、科目、活動の場面等によって差異が見られる。全般的に高校より、中学の方で英語が多く用いられているが、総じて使用度は高いとは言えない。授業中の活動が英語によって効果的に行えるような英語力、英語教授力、指導力の強化を図ることが求められる。

英語を使える日本人を育成するためには、中学校では、「スモールトーク」を中心とした「日常的に遭遇する場面で使われる言語能力」の訓練、高校では「復習」、「教授」、「まとめ」の領域において英語を交えながら指導できるスキルを養成する研修の機会を持つことが教室での英語使用度を高めるために効果があると考えられる。

#### 英語力・英語教授力に関する調査

##### a) 「英語力基準設定」に関する意見

アンケート調査協力者 58 名の内 50 名が目標値設定に賛成する意見を述べていた。設定に否定あるいは疑問視する意見は 7 名であった。無回答の 1 名を除き、約 88% が設定に賛成した。しかし、その全員が無条件で賛成しているわけではない。設定に賛成する回答者の 80%にあたる 41 名が、付帯意見や付帯条件をつけている。その主な論点は次の 4 つであった。

英語力の目標値や基準を設けると同時に、研修に出やすい環境を作ることや、英語教授力を高めるなどの研修の機会を増やすことが必要である。

目標値を達成したら給与や評価に「反映させるべき」である。逆に、「反映させるようなことは避けるべきである」という意見。

「英語力と英語教授力は別物である」ので、英語教授力の自己チェックリストなどを設定してくれると役に立つ。一方、学校のレベル・条件が多様化しているので、教授力の基準を作るのは無理だろう、という意見。

英語力の目標値は教員採用の条件とすればよいというものであった。一方、英語力基準設定に否定的回答は、「英語力と教授力は別物だから、英語力だけに目標値を設定しても意味がない」という意見に集約された。

以上の「英語力基準設定」に関する意見の内、「英語力」と「英語教授力」というキーワードが本年度の課題に関わる論点として浮かび上がってきた。

#### b) 「英語教員が備えておくべき資質能力」に関する意見

本項目に関する 14 年度報告書の記述内容を改めて検討した結果、分類を次のように修正しておきたい。

- ・英語教授に関する知識や教養（異文化理解，文化的背景，教授法，など）
- ・教員の個人的特性や人間性（性格，向上心，人間的魅力，など）
- ・生徒理解・指導に関する資質・能力（生徒を理解し受け入れる力，など）
- ・授業場面で必要な知識や技術（指導技術，授業展開，パフォーマンス力，など）
- ・英語力（ALT との意思疎通，4 技能の習熟，英語力向上意欲，など）

### 3. 英語教員の授業力の枠組み

#### 1) 英語教員の資質・能力の構造

前記の 5 つの項目について、上位概念をさらに検討すると、次のように大きく分類することができる。

「教職」としての資質・能力	英語教員に特化した資質・能力
ii. 教員の個人的特性や人間性	i. 英語教授に関する知識や教養
iii. 生徒理解・指導に関する資質・能力	iv. 授業場面で必要な知識や技術
	v. 英語力

調査規模や、回答者が準1級取得者に限られているとしても、以上の「英語力基準設定」と「英語教員が備えておくべき資質能力」に関する意見の集約によって、「英語教員の資質能力」あるいは「英語授業力」を構造化できる可能性が出てきた。そして、とりあえず、次のような枠組みを設定し、「英語教員に特化した資質能力」に関して、文献による研究をすすめた。

<英語教員の資質・能力の構造>

- 「教職」としての資質・能力
- 英語教員に特化した資質・能力
  - ・英語力
  - ・英語教授力

## 2) 英語力・英語教授力の構成要素

「英語教員に特化した資質能力」には「英語力」と「英語教授力」というふたつの構成要素がある。14年度の意識調査と久村(2003)の結果から、それぞれの下位構成要素を次のようにまとめた。

- 英語力
  - ・目標値以上の能力 能力試験で測れる英語力
  - ・ALT とのコミュニケーション能力
  - ・授業を英語で行う能力, など
- 英語教授力
  - ・英語教授に関する知識: 教授理論全般, 英語学, 日・英語の違い, 学習指導要領, テストと評価, など
  - ・国際理解教育に関する知識と教養: 異文化コミュニケーション, 文化的背景, 国際情勢, 国際英語, など
  - ・授業に必要な資質・能力: 文構造・文法規則・内容理解などのわかりやすい授業展開能力, コミュニケーション活動の技術, など

## 3) 授業の内省サイクル

ここで、「授業」という観点から英語力と英語教授力を考察する。先行研究から日常授業の循環モデルを開発した。それが次の図に示すもので、「授業の内省サイクル」と名づけた。

## 授業の内省サイクル

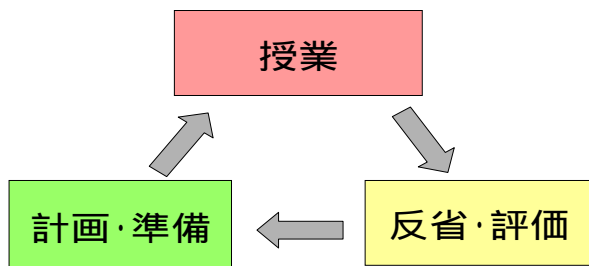


図4 授業の内省サイクル

図4を演劇にたとえると、「授業」は「実演」であり、「反省・評価」、「計画・準備」は「舞台裏」と考えられるから、この図は二つの階層に分けられる。「実演」の良し悪しは、舞台裏の稽古、勉強、心構えにかかっている。どんなに資質・能力が秀でていても、舞台裏での活動がおろそかでは演技に磨きはかからない。つまり、授業に磨きをかけるためには、計画・準備、反省・評価の段階で自己強化を図る必要がある。英語教員に特化した場合、この段階で求められる要素には、前述の「英語力・英語教授力の構成要素」が含まれる。

これらの要素が授業に直接的に関わるか、間接的に関わるかという観点で考えて見ると、英語力では「ALTとのコミュニケーション能力」、「英語で授業をする能力」が直接的、「目標値以上の達成」つまり「能力試験で測れる英語力」は間接的と言える。なぜなら、英語母語話者や英語の達人が必ずしもうまく授業ができるとは限らないからである。一方、英語教授力では「英語教授に関する知識」と「国際理解教育に関する知識と教養」(この二つをまとめて「英語教授に関する知識と教養」と呼ぶ)が間接的である。その理由は、英語教育学者や英語科教授法をマスターした学生がすぐにうまく授業ができるとは言えないからである。また、「授業場面で求められる資質能力」は直接的と言える。

授業と直接的に関わる要素をまとめて「授業で求められる資質能力」とする。間接的に関わる能力や知識・教養については、それらを深めることによって、授業力が向上することも確かである。ここで、授業の計画・準備、反省・評価の段階で必要な資質能力の大きな構成要素を整理してみると、「授業で求められる資質・能力」を柱として、「能力試験で測れる英語力」と「英語教授に関する知識と教養」があると考えられる。

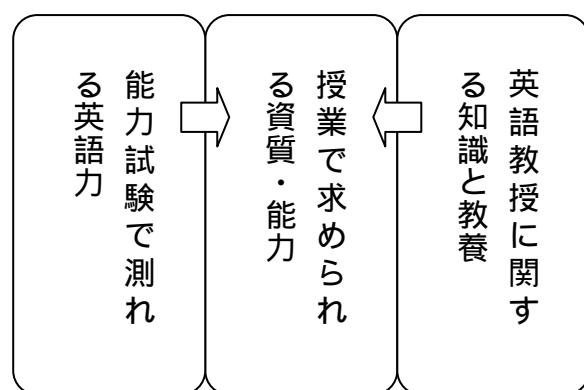


図5 授業の計画・準備，反省・評価の段階で求められる資質・能力

#### 4) 英語教員の授業力の枠組み

ここで、これまでの現職英語教員の実態調査と、先行研究によって開発した、冰山を模した「英語授業力の枠組み」を紹介する。この枠組みに関しては、昨年11月の大学英語教育学会（JACET）月例会、および、大修館『英語教育』2004年2月号ですでに紹介した。また、このモデルを開発した理由は、現職教員研修や教員養成のプログラム策定、個人研修などのガイドラインとして役に立つことを期待しているからである。

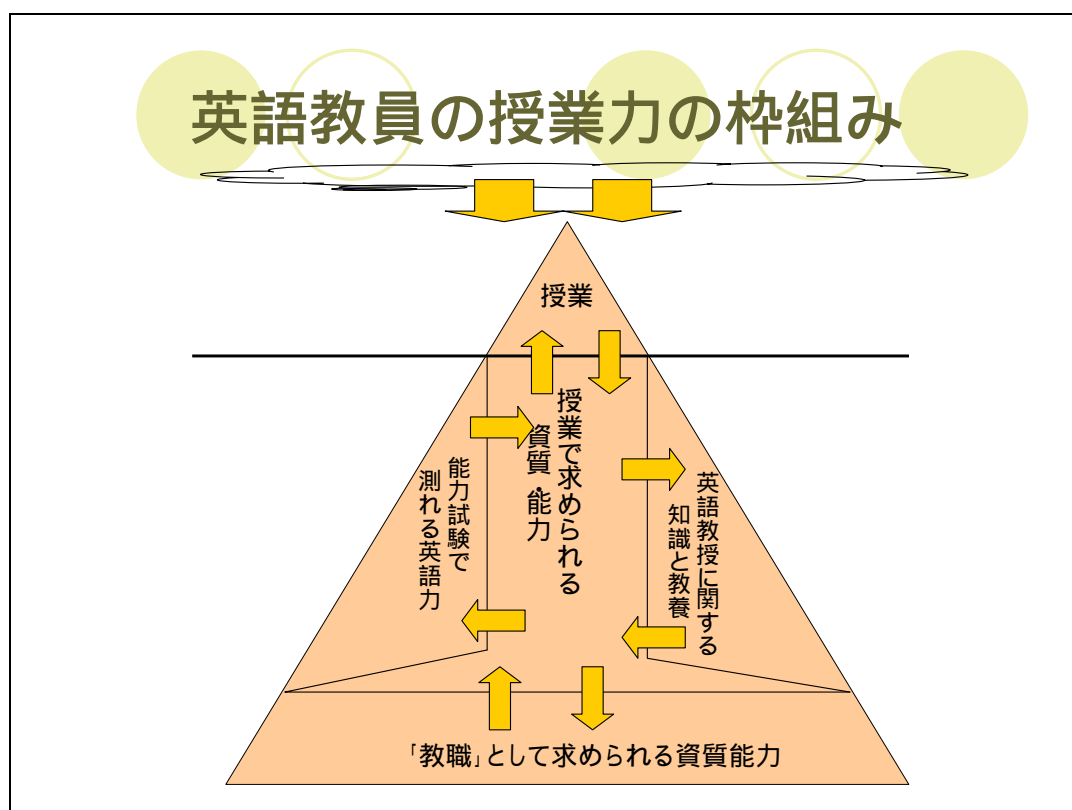


図6 英語教員の授業力の枠組み

まず、授業力の枠組みは 3 つの階層に分かれる。上層が「授業」、中層は「英語科教員に特化した資質能力」、そして下層は「教職としての資質能力」である。上層に来る「授業」は、実際の行動として具体的に目に見え参観することができる。つまり、3 つの階層で表面に現れるのが授業である。この授業を支える中層の「英語科教員に特化した資質能力」には、前述の「授業で求められる資質能力」がある。ここには、「ALTとのコミュニケーション能力」、「英語で授業をする能力」、「授業でわかりやすく規則や知識を教授したり、訓練したり、あるいはコミュニケーション活動をする指導技術など」が含まれる。また、「能力試験で測れる英語力」は直接的に授業とは結びつかないが、この能力が高まれば「英語で授業をする能力」や「ALTとのコミュニケーション能力」が高まることが期待できる。同様に、「英語教授に関する知識教養」も直接授業には結びつかないが、知識や教養が増えれば授業力が高まると考えられ。つまり、中層では「授業で求められる資質・能力」を「能力試験で測れる能力」と「英語教授に関する知識・教養」が左右で支えているという構図になる。下層にある「教職として求められる資質能力」は他の教科教育と共通するもので、HRや部活指導とも関係し、教員として基本的に備えておくべきものである。この資質能力を伸ばすことによっても「授業で求められる資質・能力」が伸びていくと考えられる。前項の「授業の内省サイクル」は、この枠組みのなかで繰り返されることにより、内実が高まっていくものと考えられる。

一方、特性と外部要因の関係を考えると、いくら特性が優れていても、困難校などの外的要素によって上から押さえつけられると、授業の部分が水面下に沈むことになり、授業の効果が少なくなる。これも「冰山」の構造で説明ができる。

以上が、平成 14 年度の委嘱研究によって行った本年度の研究の背景となる事項である。この結果に基づいて、平成 15 年度では引き続き英語力と英語授業との関わりを解明するために授業参観を行うこととなった。

## 研究の目的

平成 15 年度の研究の目的は「授業で英語を効果的に使う英語力と教授力の研究」である。つまり、「英語授業力の枠組み」で紹介した「授業で求められる資質・能力」を構成している要件を探ることである。

## 研究の方法

本年度の研究の基礎においたのが、我々のグループが平成 14 年度に実施したのは、英検準 1 級に合格した中学校と高校の現職の教員の英語使用についてのアンケートおよび聞き取り調査であった。アンケートや聞き取り調査はビリーフに基づいて回答される傾向がある。もちろん、ビリーフからの研究も必要であるが、それだけでは十分と言えない。したがって、本調査では教室における教員の実際の英語使用を調査することにした。

### 1. 英検準 1 級合格の英語教員の授業参観・録画

平成 14 年度の冬季休業中に、TOEFL(ITP)と TOEIC(IP)の受験と面接調査の協力要請に応じた埼玉，千葉，神奈川，東京在住の中・高等学校現職英語教員 58 名に対して、面接調査時に授業参観の依頼をした。承諾した 48 名の教員については、さらに文書にて正式に依頼をした。そのうち 3 名は日程等の調整がつかず、最終的には中・高等学校教員計 19 名の授業参観を行った。なお、ある中学校の先生の授業参観に行った時は、学校公開日で一般の人に授業を公開されていた。授業後、その教員から「学校公開日であっても特別な授業ではなく、普段どおりの授業を見せた」と答えたので、この授業も分析対象とした。

参観授業の内訳：中学校：11 名（ただし、1 名の授業参観ではビデオカメラの不具合のため今回の分析対象から除外した）。高等学校：8 名。

参観時期：平成 15 年 6 月～平成 16 年 2 月

本委嘱研究グループのメンバーは、平成 15 年 6 月から平成 16 年 2 月にわたり、18 名の授業参観・録画を行った。参観後は、前時の指導内容、本時のねらい、生徒の特徴、ALT との TT 授業等についてインタビュー・面接調査を行った。

### 2. 録画したビデオの分析手順

授業参観し、録画した中学校 10 名、高校 8 名の授業を文字化した。

授業の録画ビデオと文字化したスクリプトを付き合わせながら、授業の流れを把握した。

英語と日本語の発話時間、教員の英語使用領域、教科書を用いた授業、TT における JTE の英語使用、日本語使用活動という観点から各授業を分析した。

## 中学校に関する調査結果

### 1. 教員の英語と日本語の発話時間

表3 調査対象教員（中学校）の発話時間

年	教員	英語/ 秒(%)	日本語/ 秒(%)	計/ 秒	ALT 発話
1	A	488(48)	532(52)	1020	
2	B	601(51)	582(49)	1183	
2	C	148(61)	96(39)	244	756 秒
2	D	166(21)	617(79)	783	
2	E	145(12)	1046(88)	1191	313 秒
2	F	919(85)	162(15)	1081	
3	G	118(7)	1632(93)	1750	
3	H	256(18)	1193(82)	1449	
3	I	569(74)	213(26)	809	322 秒
3	J	671(100)	0(0)	671	

授業時に英語と日本語の使用割合を調べるために、中学校教員 10 名の授業について、教員の発話時間を「英語」と「日本語」にわけて計測・集計した。全ての授業が 45 分または 50 分授業であった。左の列は、授業対象の学年である。

そして授業者の名前、そして、英語と日本語の発話の秒単位の表示である。カッコに全体の発話時間からのパーセントを表示している。次の列は、英語と日本語の発話時間の合計で、一番右の列は、ALT との協同授業の場合の ALT の発話時間である。この表から 2 年生で授業した F 先生と 3 年生を担当した J 先生の授業を取り上げ、英語使用領域を検討することにした。F 先生は英語の発話時間が全体の 85% で、J 先生は、100% であった。

### 2. 英語をよく使う中学校教員の英語使用領域

F 先生と J 先生の授業の発話を表 2 で紹介した 7 領域に当てはめてみた。その詳細な結果は、補遺 A と補遺 B で示している。分析している段階で、表 2 で紹介した 7 領域には、いくつかの発話に該当する項目が無いことが判明した。それで、7 領域に、「活動に関する指示」、「生徒の発言のサポート」、「生徒の質問に答える」、「終わりの挨拶」、「生徒に対する質問をする」、「モデル発話」の 6 項目を増やした。分類した時の基準を適用し、前の 4 項目を「教室英語」に、後の 2 項目を「練習」に入れた。そして、補遺 A と補遺 B のデータを纏めたものが、表 4 である。左側の数字は、各領域に当てはまる発話の回数を示している。



表4 英語をよく使う中学校教員の英語使用領域

英語使用領域	F先生	J先生
教室英語	28	43
スモールトーク	3	4
復習	2	0
練習	14	17
導入	3	0
まとめ	1	1

この表が示すとおり、J先生の発話の英語使用領域は、「教室英語」、「スモールトーク」、「練習」、そして「まとめ」の領域に入る。F先生の発話の英語使用領域は、「教室英語」、「スモールトーク」、「練習」、「導入」、「まとめ」である。我々が調査した「英語をよく使用する」2名の先生の英語使用分析は、前年度実施した「教室

室内における英語使用に関する調査」結果をほぼ裏付けるものとなった。このことは、授業で「教室英語」、「スモールトーク」、「練習」の領域で英語を使えば、英語使用率は高くなると言えるだろう。

### 3. 英検準1級に合格した中学校教員が日本語を使う活動

表5 B先生の授業 特徴：表現活動+教科書指導

領域	内容	日本語使用
教室英語	あいさつ	なし
ST	天候，曜日，昨日のことなど	なし
練習	単語ビンゴ	単語意味確認
復習	トピックを復習しながら，生徒に文法の表現活動をさせる	文法の解説時
教授	教科書本文指導：単語学習 本文をCDで聴取後のQ&A 生徒に和訳指示	単語の意味確認，本文のスキーマを与える時 本文の和訳指導時
教室英語	終わりのあいさつ	なし

英検準1級に合格した中学校教員が日本語を使用している場面を特定するために、文字起こしをした調査対象者の授業を表5の形式にまとめ、流れが把握できるようにした。表5で示すB先生の授業は、自己表現活動の後に教科書の和訳が主の活動だった。授業の流れは、あいさつの後スモールトーク（天候，曜日，昨日のことなど）した。その後、単語ビンゴで、単語の意味確認は日本語で行った。続

いて、教科書の本文のトピックを復習しながら、生徒に文法を使った自己表現活動をさせた。文法解説の時に日本語を使った。その活動の後、教科書本文指導と続く。そして新出単語学習して、本文の内容をCDで聴取させた後、その内容に関するQ&A。そして生徒を指名して本文を和訳させた。日本語使用は、単語の意味確認、本文の

スキーマを与える時や本文の和訳の場面であった。英語を多く使った2名と表5で示したB先生を除いた他の7名の教員の授業も表5と同じ方式でまとめなおした。それらの結果を、授業で日本語を使った中学校教員の日本語の発話を一覧にしてまとめたものが表6である。

表6 調査対象教員9名(中学)の日本語の発話

		主な日本語の発話
1年	A	文法解説, 単語の意味, 発音指導, 本文のスキーマを与える
2年	B	文法解説, 単語の意味, 発音指導, 活動の指示を与える, 本文のスキーマを与える, 本文の和訳をする
2年	C	発音指導, 発話促し, 難しい指示
2年	D	文法解説, 生徒の発言を日本語で繰返す, 生徒に注意, 宿題の指示
2年	E	文法解説, 理由を聞く, 単語意味, 活動の指示
2年	F	文法解説, 単語の意味, 活動の指示, 英文の意味を解説, 本文の内容理解質問,
3年	G	文法解説, 単語の意味, 活動の指示, 本文の和訳
3年	H	文法解説, 解答解説, 指示
3年	I	質問の発話促し, 指示

そして、9名の教員の授業を分析した結果、日本語使用の活動は、表7に示したとおりになる。

表7 準1級に合格した中学校教員が日本語使用の活動

日本語の内容	
活動の指示をする	8名
文法の解説をする	7名
単語の意味を与える	5名
発音を指導する	3名
本文の和訳をする	2名
本文のスキーマを与える	2名
生徒に発話を促す	2名

表7から考えると、調査した準1級合格の教員の半数が日本語を使った場面は「活動の指示をする」、「文法を解説する」、「単語の意味を与える」となる。準1級に合格した教員が中学校で授業をする場合、これらの活動は、英語では効果的に指導しにくいと考えられるのではないかと。授業で英語の使用を高める必要はあるが、すべてにおいて英語というわけではなく、指導効果から考えて英語と日本語を有効に使うことが必要だろう。

#### 4 . ALT との協同授業における中学校教員の英語使用活動

表 8 I 先生の授業 特徴：ALT との表現練習

領域	内容	日本語の使用
教室英語	あいさつ	なし
練習	JTEがALTに予定を聞く。	なし
練習	その会話について、 <u>ALTが生徒に質問をする。難しい発言には、JTEが英語でやさしく言い換え。その後TTで答え合わせ。</u>	難問は日本語で発言を促す
練習	TTで「 <u>予定</u> 」を聞く・答える会話のデモンストレーション 生徒にペアでインタビュー活動 その結果をクラスに報告させた。	こみいった指示は日本語
復習	TTで、 <u>指名しながら、英文の出だしだけを与えて受動態の英作文をさせた。</u>	なし
まとめ	宿題の指示	なし
教室英語	終わりのあいさつ	なし

ALT との協同授業を分析した。I 先生の授業では、ALT との協同授業で生徒の表現練習が中心だった。挨拶のあと、JTE が ALT に夏休みの予定を聞いた。そして ALT が話した内容について生徒に質問をした。難しい発言には、JTE が英語でやさしく言い換えた。その後 TT で答え合わせ、難しい質問だけ JTE が日本語で生徒に発言を促した。つづいて、TT で「予定」を聞き答える会話のデモンストレーション ペアでインタビュー活動 そのインタビューした結果をクラスに報告させるといった活動だった。込み入った指示は日本語

で行った。それから、TT で文法の復習をした。生徒を指名しながら、英文の出だしだけを与えて受動態の英作文をさせた。最後は、宿題の指示だった。下線部がある箇所が TT の活動である。今回授業観察をした中で、ALT と協同授業をした先生は 3 名だった。他の 2 名の授業（補遺 D と補遺 F）にも表 8 と同じ方法で分析した。

表 9 ALT との協同授業における中学校教員の英語使用活動

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ALT とデモンストレーションをする</li> <li>・ ALT に質問して情報を引き出す</li> <li>・ ALT に指示をして生徒を指導させる</li> <li>・ ALT の英語一部を平易な英語で言い換える</li> </ul>
---

ALT と協同授業した 3 名の授業の流れを分析した結果、表 9 で示すようにまとめることができた。つまり、ALT との協同授業における

JTE の英語使用能力は、「ALT とデモンストレーションをする力」、「ALT に質問して情報を引き出す」、「ALT に指示をして生徒を指導させる」、「ALT の英語一部を平易な英語で言い換える」という活動を実施する能力である。最後の「ALT の英語一部を平易な英語で言い換える」能力については、英語ではなく日本語で翻訳していた教員が多かったが、平易な英語で言い換えていた場面もあったので、この項目をリストに加えた。

まとめると、この4つの力が中学校でALTと協同授業をする場合に求められるので、この能力について研修をするとALTとの協同授業の時に、さらに効果的な英語での授業が可能になると考えられるだろう。

### 5. 中学校教員の教科書の本文指導例

教科書の本文指導をJTE単独で行った教員は4名いた。中学校の教員であれば、教科書指導は、避けてとおれない指導である。したがって、この点にも注目した。表10は、左の欄から担当者、学年、形態（Uは習熟度別の上位、Lは下位、Nは習熟度に分けないクラスを表す）である。

表10 4名の中学校教員の教科書本文指導例

名	年	形態	配分時間	英語	直前活動	教育機器
				日本語		
F	2	N	17分	588語	表現活動	黒板, CD, FC, 数枚の絵, 音読練習プリント
				142字		
B	2	U	19分	537語	表現活動	黒板, CD, FC, 1枚の絵, 地図
				1864字		
G	3	L	33分	536語	聴解	黒板とCD, FC
				6112字		
J	3	N	24分	459語	表現活動	黒板, CD, 数枚の絵,
				0字		

次の列は、教科書指導にかけた時間を分で表した。そして次の2段になっている列は、教員の発話を文字化し、英語の単語数と日本語の文字数を数えたものである。この数値表記で、授業での英語と日本語の使用の実態を理解できるであろう。明らかに3番目の先生は日本語を多用しての授業だということがわかる。「直前活動」は、教科書指導に入る前にどのような活動をしていたかということを表している。最後の「使用教具」は使われた教科書以外の教具を表す。次に、クラスの人数であるが、

上の3名が担当したのは少人数クラスである。一番下のJ先生だけが普通サイズクラスである。この表からわかるように、学年や習熟度などの条件は異なるが、授業スタイルによって教科書の本文にかけた時間と英語の使用率に大きな相違がある。F先生は、ほとんど英語で指導した。B先生は、半分くらい英語で、G先生はほとんど日本語であった。J先生は日本語を全く使わなかった。

教科書本文の内容理解では、G先生とB先生は、和訳をした。そのため、日本語の使用が多くなった。F先生とJ先生は、和訳をしなかったから、日本語の使用が少ない。教科書の本文に入る前の活動で、G先生は、英語での自己表現活動をさせなかった。そのため、教員の英語使用も少なかった。B先生とF先生とJ先生は、英語を使った自己表現活動をさせた。その結果、教員の英語使用が多くなった。そして、本文の理解が終わった後で、F先生とJ先生は、絵などを工夫し活用し、暗唱指導を行った。G先生は、板書が主で、絵は用いられなかった。F先生とG先生の詳細な指導案は、補遺IとJで示している。

表 11 教科書本文指導で英語を多く使う中学校教員が使う指導法

<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自己表現活動を指導する</li> <li>● 絵などの補助教材を使って英語で説明する</li> <li>● 生徒に本文などを暗唱させるまで音読させる</li> </ul>	<p>英語を多く使う教員は、教科書本文を指導する時、表 11 で示した特徴、つまり「自己表現活動を指導する」、「絵などの補助教材を使って英語で説明する」、「生徒に本文などを暗唱させるまで音読させる」指導をしていることが判明した。</p>
--	--

## 6 . 英語科で All English に向けて取り組んでいる中学校の例

授業で英語をよく使っている F 先生の授業参観の後の面談で、授業の取り組み等に関して聞いた。その結果、次のようなことが判明した。その中学では、英語科(構成は1級合格者、準1級合格者、新任2年目の3名)として、All English の授業を目指している。その目標を達成するために、統一評価基準の設定し、統一副教材開発・使用によるきめ細かな指導を行っている。とりわけ音読指導は、授業で暗記するまで指導した後、生徒が音読を自分で練習しやすいプリント(補遺 S)を使って自分で 26 回練習した後、暗唱を評価するシステムにより、生徒は音読に積極的に取り組んでいた。授業が終了直後や昼休みそして放課後は、先生の回りに生徒の列ができる」と報告された。

英語を使う授業について、F 先生は現任校に来るまでは訳読式授業を実施してい

たが、ALT の週 1 回の定期訪問と英検 1 級合格の同僚教員によって刺激され、英語を多く用いた授業を心がけることになったと述べていた。

表 12 ある公立中学校の 3 名の教員の比較

	英語/秒(%)	日本語/秒(%)	計/秒(%)
1 級合格者	1084(92)	94(8)	1178(100)
準 1 級合格者	892(90)	97(10)	989(100)
新任 2 年目	650(79)	173(21)	823(100)

我々研究グループの 3 名は、この中学校の協力体制を確認するために、再度、学校訪問し、3 名の教員が同学年、同時間帯に同じ指導手

順で教えているという授業を観察・録画した。確かに、3 名の先生方は、同じ内容を同じ指導手順でそれぞれのクラスを教えていた。3 名の授業の英語使用を分析した結果が表 12 である。この結果からみる限り、同じ内容を指導しても 1 級合格教員の英語使用が最も多いという結果がでた。このことは、サンプルは少ないが、能力試験と英語力の関係を述べるものと推察できる。また、この中学校の取り組みは教科内での協力が、効果的に機能している例と考えられる。

## 7. 本研究に基づく中学教員の英語授業力の枠組み

本調査から導き出される目標値（準 1 級合格）以上の中学校教員が保持していると考えられる「教室で必要とする英語力」の構成要素は：

- 「目標値」以上の能力
- 授業で「教室英語」、「練習」、「導入」、「S T」を英語で行う能力
- ALT と授業をする英語運用能力
  - ・ ALT から情報を引き出す力
  - ・ ALT に生徒を訓練させる力
  - ・ ALT と協同でモデルを示す力
  - ・ ALT の言ったことを生徒に伝える力

などと考えられる。

そして、本調査から導き出される目標値（準 1 級合格）以上の中学校教員が保持していると考えられる「教室での英語教授力」の構成要素は：

- 文法を使って自己表現活動を指導する力
- 絵などの補助教材を使って英語で説明する
- 生徒に本文などを暗唱させるまで音読させる力

などと考えられる。

この「英語力」と「教室での英語教授力」は、氷山の構造で示したように、外部的な要素によって、十分に発揮できないことは考えられる。また、研修を実施したり、教科内で学び協力し合ったりする体制を作ることにより、授業をさらに効果的にする英語力と英語授業力高めることも考えられるだろう。

## 高等学校に関する調査結果

### 1. 対象教員の発話時間

調査協力を得た準1級取得教員合計8名の授業中の英語・日本語の発話時間の状況は、表13で示した。

表13 調査対象者（高校）の発話時間

	教員	英語/秒(%)	日本語/秒(%)	合計/秒	ALT 発話
英語	K	77(8)	910(92)	987	
英語	L	613(38)	991(62)	1604	
英語	M	715(70)	313(30)	1028	
英語	N	48(4)	1258(96)	1306	
英語	O	471(20)	1883(80)	2354	
英語	P	53(3)	1498(97)	1551	
OC	Q	309(51)	269(49)	605	545 秒
OC	R	277(93)	20(7)	297	1143 秒

授業時間は50分、65分、70分と異なるので、計測された英語と日本語の使用量のパーセントを比較する。英語I・IIについては、授業の70%、38%を英語で行ったM先生とL先生を除いて英語使用量は限られており、半数は10%にも満たない、すなわち、授業中にほとんど英語は用いられていなかったということになる。授業はいずれも、教科書を用いた平常の授業で、テキストの本文を扱ったものである。

M先生（補遺 M）とL先生（補遺 L）については，表 14 で詳述する。その他の先生のうちO先生（補遺 O）の授業は英語 で新しい課への導入と本文理解を扱った。導入の背景知識の確認では「スモールトーク」で生徒にも自然な英語使用の状況を作り出していた。本文の内容理解や発展的質問にも同様の状況が作り出されており，先生も生徒も authentic input/output の機会を得ていた。しかし，本文内容理解指導の大半は訳読であった。他の先生の場合は，文法訳読法で行っていた。このような授業での英語使用は，生徒にフィードバックを与えるときの“Very good.”，音読の指示“Repeat after me.”程度であるから，表 13 で示した教室の英語使用量 10%以下の場合には，ほとんど英語を用いておらず，「目標値」に達していても，授業ではその英語力が効果的に使われているとは言えない。

## 2．英語を使用している教員の英語使用領域

### 1) 英語使用領域

ここでは，授業の 70%を英語で行っていたM先生と，38%のL先生の授業の分析を行う。両者とも目立って多い英語使用領域は，「教室英語」と「練習」である。教室英語では，「生徒の活動や行為をほめる」(“Good.” “Very Good.” “OK.”など)，「活動に対する指示」(“Open your textbook.” “Repeat after me.”など)，「生徒の発言をサポートする」(生徒の回答を繰り返したり，言い直したり，補足したりする)であった。練習では「(リピートの時)生徒にモデルを示す」もので，語・句・文を次々に復唱させたため使用度数が多くなった。M先生で特徴的なのは「導入」である。先生は，テキスト本文の概要を英語で導入された。そのため，本文に出てくる「レッスントピックを導入」したり，「新出語の導入」を行ったり，また，「トピックの

表 14 高校教員 2 名の英語使用領域

英語使用領域	M	L
教室英語	44	16
スモールトーク	2	0
復習	0	1
導入	17	1
教授	8	14
練習	43	33
まとめ	0	2

背景を説明する」(新たに「導入」に加えた項目)活動が多かった。L先生は，前時のレッスン内容を英語によって口頭で一方的に述べた。

注目すべきは，「教授」の度数である。中学校で英語をよく使用する先生でも，この領域で英語を使用している先生はほとんどいなかった。その内容を見ると，英語のQAによる「内容把握の指導をする」が両

者とも多く，L先生の場合は，「文をパラフレースする」こともあった。

この結果から直ちに，中学校教員と同様に，目標値（準 1 級合格）以上の高校教



員が保持していると考えられる「英語力」の構成要素を導き出すことは無理である。事例が少ないことと、この事例だけで英語力と英語教授力の構成要素を引き出すことができないからである。ただし、この二つの事例の主な英語使用活動と日本語使用活動から、今後の課題を探ることは可能であろう。

## 2) 英語使用活動と日本語使用活動

表 15 主な英語使用活動と日本語使用活動 特徴：教科書指導

領域	M先生（65分授業）		L先生（50分授業）	
	英語使用活動	日本語使用活動	英語使用活動	日本語使用活動
導入	内容スキーマ提示 ・ 本文概要 ・ 内容の背景 ・ 新出文構造，新出語，表現，文法事項の提示 ・ 語句・文の復唱指示	・ 語彙の意味 ・ 背景，分かりにくい内容，などの簡単な説明	前時のレッスン 内容の要約	なし
教授	右欄の日本語による訳読，音読後，プリントを利用した内容理解のためのQA	本文の訳読 ・ 日本語訳指導 ・ 文脈の解説 ・ 文法解説 ・ 語義の説明	本文を読みながら，内容理解のためのQA	・ 英語によるQA中，やや難解な内容を説明 ・ 英語による指導終了後，同じ本文を訳読（質問は英語によるQAとほぼ同じ） ・ 文構造，語彙，文法説明 ・ 指示語に関する質問，など
練習	音読指導 本文内容のサマリー	・ 発音指導 ・ 活動の指示 ・ 活動の理由説明	音読指導	・ 発音指導 ・ 和文英訳

英語使用活動と日本語使用活動を特定した表 15 は、わずか 2 名の事例である。

しかし、授業参観した他の教員がほとんど英語を使用していないことから、この2名の事例で課題を検討せざるをえなかった。

まず「導入」部分の英語使用であるが、M先生の場合、内容スキーマから入りながら、同時に、形式スキーマも導入している。さらに、語、句、文の復唱を生徒に繰り返し指示したり、新語や若干難しいと考えられる語句・表現などを日本語で解説している。復唱の指示によって生徒に参加を呼びかけていると考えられるが、全体として、この授業開始の時間は教員の一方通行的な授業が展開されている。L先生の場合は、前時のレッスン内容を英語で話しているだけで、これも授業開始の時間を教員からの一方通行で終らせている。

「教授」の領域では、日本語による訳読が主体となる。L先生の場合は、はじめに文を読みながらの英問英答を行っているが、実際には生徒の反応はほとんどなかった。両先生の授業展開の内容的な特徴は、英語使用量の差はあるが、類似したものとなっている。つまり、英語で行った活動内容と、日本語で行った活動（訳読）内容がほぼ重なることである。英語で行ってから、ほぼ同じことを日本語で行う、ということである。ここには、「英語を日本語で訳さなければ生徒は理解しない」という共通認識が働いているように思える。

「練習」の形態と内容は異なるが、その中でも音読指導の重要性を理解されているようである。しかし、中学のように暗記させるまでの音読には至っていない。また、L先生は、訳読後テープを使っていきなりシャドーイングをするよう指示しているが、音読練習を十分にする前のシャドーイングは無理と言えよう。一方、M先生は、プリントでサマリーのモデルを与えて、「本文のサマリーを生徒に口頭で言わせる」形態の自己表現活動を取り入れている。

英語を使用している両者に限ってみても、本文指導の際、英語は使用するものの、本文の意味を正確に理解させるために、訳読に頼っている。

### 3. 英語 ・ の授業分析からの課題

以上の事例から次のような課題を指摘することができるであろう。

- 1) 導入場面におけるスキーマの活性化：授業の始めに教科書本文のスキーマを導入する場面で英語を使用する場合、教員の一方的な「語り」にならないような指導技術が求められる。
- 2) 日本語・英語による指導の使い分け...常に日本語で確認を求める姿勢：英語で活動をした後に、同じような内容に関して日本語を使用して生徒に確認を求める姿勢を再検討する必要がある。
- 3) 音読指導の強化：中学の場合、「暗唱させるまで音読させる力」を英語教授力の一つの構成要素としてあげたが、高校の場合でも、音読の重要性は変わら

ないので、この活動の強化を図る必要があるだろう。

- 4) 文法を使った自己表現活動の強化：OCばかりでなく英語 I， においても、自己表現活動は「英語が使える日本人」育成のためには必要な活動である。M先生の試みはその 1 例だが、訳読中心の授業においても、この活動を積極的に取り入れる指導が求められる。

以上の課題は発見できたが、残念ながら事例が少ないので、高校の教科書指導における「英語力と英語教授力」の構成要素を抽出することができなかった。そして、観察した限りでは、中学校のような英語を使用した指導法の類型は見つからなかった。それだからといって、教科書指導において、教材内容や学習者のニーズが異なるので、中学校の指導方法を高校に適用するのは必ずしも妥当とは言えない。

### 5．OCでの TT における JTE の英語使用活動

参観した二つのOCの授業は、いずれも英語母語話者の ALT との協同授業であった。その授業の中での日本人教員が、どのような英語を使用して活動をしているかを示したものが表 16 である。

表 16 TT における JTE の英語使用活動

	R	Q
協同でデモをする		
平易な英語で言い換える	×	
ALT に生徒を訓練させる		
ALT から情報を引き出す		
ALT と交渉をする		×
ALT に指示をする		

印はよく行っている活動， 印は時々行っている活動， ×印はほとんど行っていない活動を示している。二人の先生がともによく行っている、あるいは、時々行っている活動は、「協同でデモンストレーションをする」、「ALT から情報を引き出す」、「ALT に指示をする」の 3 項目で、

中学校で行われていた活動の 4 項目中この 3 項目が一致している。中学校では発見されなかった「ALT に生徒を訓練させる」は R (補遺 R), Q (補遺 Q) 両先生ともよく行う活動となっている。一方、「平易な英語で言い換える」は Q 先生が多少行っているが、R 先生は日本語で語句の意味を言い換えていた。また、「ALT と交渉をする」というのは、授業中に ALT と授業の進め方などで打ち合わせをしたり、依頼したりする活動である。R 先生はこの活動をよく行っていたが、授業進行の妨げにはなっていない。

わずかに二つの事例ではあるが、高校のOCにおける協同授業での日本人教員に求められる「英語力」にはこの六つの構成要素が含まれると考えられる。

## 調査結果

### 1. 『英語で効果的に授業を行うための「英語力」』の要件

#### (1) 中学校教科書指導の場合

- ・「目標値」以上の能力（能力試験で測れる英語力）
- ・授業で「教室英語」、「練習」、「導入」、「スモールトーク」を英語で行う能力，など

#### (2) 中学校の協同授業と高校OCでの協同授業の場合

- ・「目標値」以上の能力（能力試験で測れる英語力）
- ・ALT から情報を引き出す力
- ・ALT に生徒を訓練させる力
- ・平易な英語で言い換える力
- ・ALT と協同でモデルを示す力
- ・ALT と交渉をする力
- ・ALT に指示をする力，など

### 2. 『英語で効果的に授業を行うための「英語教授力」』の要件

#### (1) 中学校教科書指導の場合

- ・自己表現活動を指導する力
- ・絵などの補助教材を使って英語で説明する力
- ・生徒に本文などを暗記させるまで音読させる力，など

#### (2) 高校英語 ・ 指導の場合

なし

今回の調査では、効果的に英語を使っている教員の授業データが不足した。しかし、中学校の上記要件を発展させた力が要件となるものと推測される。

合計 35 名の高等学校教員に TOEFL と TOEIC 試験の協力を得ることができたにもかかわらず、授業参観の許可を得られたのはそのうち 8 名のみであった。この事態が、中学校に較べて、高等学校の英語授業の解明が、この調査では不十分になってしまった原因であることを付記しておかなければならない。

## 今後の課題

本研究では、氷山の形で示した「英語授業力の枠組み」の中で、「授業で求められる資質・能力」の要件を、限られた授業サンプルを分析して手掛かりを模索した。高等学校では、この部分を明らかにすることはできなかったが、中学校では、4つの領域で広く英語が用いられていた。その領域における指導技術の開発と経験の積み重ねが教員を成長させ、英語による授業を可能にさせているのではないかと推測できる。また、中学校の教員の校内連携による授業実践例は、「授業の内省サイクル」を実践していた例でもあり、これが、「授業で求められる資質・能力」向上の原動力になっているであろうと推察できる。そうであるとすれば、一方では「英語力」を高め、もう一方では「英語教授に関わる知識と教養」を深めながら、「授業の内省サイクル」によって「授業で求められる資質・能力」即ち、「授業力」を高めることが、英語で効果的に授業を行うために不可欠である。

この研究成果は、授業で求められる「英語力」や「英語教授力」のベンチマーク、あるいは、チェックリスト作成の基礎資料を提供している。今後、さらに必要要件項目を加えていくことによって、日本における英語教員が備えるべき資質・能力の基準を設定することが課題であろう。

なお、この研究成果は、教員研修のプログラム策定に活用できるであろう。

### 【引用・参考文献】

Bailey, K.,M. et al(2001) *Pursuing Professional Development* HEINLE &HEINLE

Cummins, J(1984) *Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy*, in 吉田他(2003)『日本語を活かした英語授業のすすめ』東京：大修館書店

「英語教育」(2002)「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」について 文部科学省に聞く」『英語教育』 Vol. 51, No. 10

八田玄二(2000)『リフレクティブ・アプローチによる英語教師の養成』金星堂

久村 研(2003)「英語教員の英語教授力をめぐって」(『平成14年度 現職英語教員の教育研修実態と将来像に関する総合的研究』pp.68-92) 英語教員研修研究会 (TERG)

金谷 憲編著(1995)『英語教師論』河源社

文部科学省(2003)『「英語が使える日本人」の育成のための英語教員研修ガイドブ

ック』(文部科学省委嘱研究)「英語教育に関する研究グループ」報告書  
 酒井志延(2004)「英語授業力の枠組み」『英語教育』Vol. 52 No.12 pp.37,大修館書店  
 佐野正之編著(2000)『アクション・リサーチのすすめ 新しい英語授業研究』大修館書店  
 米山朝二(2003)『英語教育指導法事典』研究社

補遺 A: F先生の英語使用領域

領域	活動	回数
教室英語	生徒の活動や行為を誉める	3
教室英語	生徒の誤りを訂正する	3
教室英語	活動に関する指示	14
教室英語	生徒の発言のサポート	6
教室英語	生徒の質問に答える	1
教室英語	終わりの挨拶	1
スモールトーク	授業開始のあいさつをする	1
スモールトーク	欠席の理由を聞く	1
スモールトーク	天候について聞く	1
復習	前の授業を復習する	2
練習	ゲームを指導する	2
練習	生徒に対する質問	7
練習	モデル発話	5
導入	重要構文を導入する	1
導入	レスントピックを導入する	1
導入	本文を導入する	1
まとめ	次の授業の指示をする	1

補遺 B: J先生の英語使用領域

領域	活動	回数
教室英語	生徒の活動や行為をほめる	31
教室英語	任意の参加を求める	1
教室英語	活動に関する指示	8
教室英語	生徒の発言をサポートする	3
スモールトーク	授業の初めに曜日等を確認する	1

スモールトーク	天候について聞く	1
スモールトーク	前日等の話題・行動について聞く	1
スモールトーク	日常的な話題を提供する	1
練習	コミュニカティブ活動をする	9
練習	生徒に対する質問(練習)	8
まとめ	次の授業の指示をする	1

補遺 C A先生の授業 特徴:リスニング活動が中心

領域	内容	日本語を使う場面
教室英語	挨拶	
練習	ビンゴゲーム	
練習	リスニング:CDを聞かせた後,指名して答え合わせ,文法解説	文法解説
教授	歌指導:虫食いの歌詞を聴き取らせたあと,歌の単語意味と発音指導	歌の単語意味と発音指導で日本語を多用
導入	教科書の本文のさわり	スキーマを与える時
教室英語	おわりの挨拶	

A先生の授業はリスニング活動が中心だった。あいさつのあとビンゴゲームそして市販教材のリスニングクイズをした。CDを聞かせた後,生徒を指名して答え合わせをした。その時に文法解説で日本語を多用した。続いて,歌指導である。方法は,虫食いの歌詞プリントを与え,その歌詞を聴き取らせる方法である。歌詞が難しかったせいか,歌の単語意味と発音指導で日本語を多用した。最後に,教科書の本文のさわりを導入された。本文のトピックのスキーマを与える時日本語を多用した。

補遺 D C先生の授業 特徴:TTで自己紹介の練習

領域	内容	日本語を使う場面
教室英語	挨拶	
練習	ALTが自己紹介し,生徒に情	難しい説明を解説

	報をワークシートに書き込ませる。 JTEは、ALTに質問したり、難しい説明を解説したり、活動の指示をした。	活動の指示
練習	TTで、発音指導を含みながらワークシートの答え合わせ。	発音指導 発言を促す時
練習	自己紹介の練習:生徒に自分のことをワークシートに書き込ませた後、自己紹介方法を指導	難しい活動の指示
教室 英語	おわりの挨拶	

C先生の授業:自己紹介の練習だった。挨拶の後、初めてクラスを訪れたALTを紹介し、ALTが自己紹介し、生徒はワークシートに聞き取った情報を書き込んだ。JTEは、質問したり、日本語で難しい説明を解説したり、活動の指示をした。次に、TTで、ワークシートの答え合わせをした。発音指導や発言を促す時にはJTEが日本語で行った。そして、自己紹介の練習と続く。生徒にワークシートに自分のことを書き込ませた後、ALTが主になって自己紹介方法を指導した。こみいった活動の指示はJTEが日本語でした。

補遺 E D先生の授業 特徴:文法で自己表現活動

領域	内容	日本語を使う場面
教室 英語	挨拶や天候,日付	
復習	生徒を指名して文法事項(want to)を使って作った文を読ませる	文法のまとめの解説
教授	文法事項(be going to)指導	文法解説
練習	生徒に文法を使った文を作らせて発表させる。	生徒の英語を日本語で繰り返す 文法解説 生徒に注意
まとめ	宿題の指示	指示
教室 英語	おわりの挨拶	



D先生の授業は、文法で自己表現活動が中心の授業だった。挨拶の後、天候や日付を聞いた。次に、文法事項(want to)の復習で、生徒が作った文を指名して読ませた。指導の纏めとして、文法解説を日本語で行った。続いて、新文法事項(be going to)指導である。まず、文法解説をしてから、プリントを使って生徒に作文をさせ、その文を発表させた。生徒が言った英語の文を先生が日本語で繰り返した。文法解説と生徒に対する注意で日本語を使った。終わりに宿題の指示を日本語でした。

補遺 F: E先生の授業 特徴:ALTと会話の授業

領域	内容	日本語を使う場面
教室英語	挨拶	
ST	近況についてJTEが質問する	
練習	JTEがALTに予定を聞き未来の表現を確認	意味を解説
教授	教科書の会話表現をTTでデモ 内容確認の質問と文法説明	指示 内容確認の質問, 文法説明
練習	教科書本文をALTの後について読ませる	新出単語 本文の解説
練習	プリントで会話の応用練習	指示と解説
復習	前時のやり残し	指示と解説
教室英語	おわりの挨拶	

E先生の授業は、ALTと協同で行う会話の授業だった。挨拶の後、ALT、JTE、生徒でSTをした。その後、ALTの予定を聞き未来の表現を確認した。JTEは日本語でALTが言った言葉の意味を解説していた。続いて、教科書の会話表現をTTでデモした。指示、内容確認の質問、文法説明は日本語だった。そして、教科書本文の指導に続いた。新出単語や本文の解説は日本語で行った。プリントで会話の応用練習した。指示と解説が日本語だった。最後に前時のやり残しの復習をした。

補遺 G: H先生の授業 特徴:文法学習

領域	内容	日本語を使う場面
教室英語	挨拶の後、天候などを聞く	

練習	前時の目標文を先生の後のリピートさせる	
練習	文法学習 Yen is used in Japan.を使って通貨と国名を入替えて練習。	
教授と練習	Yen is used by Japanese.で通貨と国民名を入替えて練習。通貨と国名, 国民名は先生が生徒にリピートさせる。	文法を解説
練習と教授	受動態の文法のプリント学習: 生徒が黒板に問題の答えを書いて, 先生が答え合わせと解答解説	答え合わせと解答解説
まとめ	次の時間の指示	指示
教室英語	おわりの挨拶	

H先生の授業は、文法学習が中心の授業だった。挨拶の後、天候などを聞いた。続いて、前時の目標文を先生の後をリピートさせた。そして、文法を使った練習である。まず、Yen is used in Japan.を使って通貨と国名を入替えて練習させた。次に Yen is used by Japanese.で通貨と国民名を入替えて練習させました。通貨と国名, 国民名は先生が生徒にリピートさせたが、ほとんどは日本語で文法を解説していた。まとめとして、受動態の文法をプリントで学習した。生徒が黒板に答えを書いて、先生が答え合わせと解答解説をほとんど日本語で行った。最後に次の時間の指示を日本語でした。

補遺 H: G先生の授業 特徴: 文法訳読式

領域	内容	日本語を使う場面
教室英語	挨拶	
練習	リスニング: CD 聴取後答え合わせ。リスニングテキストを読んで和訳	教員発話は答え以外ほとんど日本語
教授	教科書指導: CD 聴取 フラッシュカード CD で読む練習	単語の和訳 文法解説

	個人練習 生徒を指名しながら文法解説と本文の和訳	本文の和訳
練習	プリント学習:文法練習	指示
まとめ	宿題の指示	指示
教室英語	終わりのあいさつ	

G 先生の授業は、文法訳読式指導だった。挨拶の後リスニング指導である。CD 聴取させた後、答え合わせ。リスニングテキストを読んでその和訳、教員発話は答え以外ほとんど日本語だった。次に、教科書指導に入った。CD 聴取 フラッシュカード(単語の和訳を含む) CD で読む練習 個人練習 生徒を指名しながら日本語で文法解説と本文の和訳と言う流れだった。最後にプリント学習であった。その指示は日本語だった。

#### 補遺 I: F 先生の指導の流れ

活動	教員の活動	生徒の活動	教員言語	生徒活動領域
始まりの挨拶	Good morning. など	あいさつに答える	英語	L&S
アイスブレイキング	ビンゴの問題を言う	英語の聴解と筆記	英語	L&W
口頭による復習	生徒個人に対して Do you think... ?について聞く	先生の問いに答える	英語	L&S
宿題の確認(1)	生徒個人に対してプリントの答え合わせ	先生の問いに対して、用意してきた答えを言う	英語	L&S
宿題の確認(2)	生徒個人に対してプリントの答え合わせ。英語を読んでから日本語で意味を言わせる。そして応用的質問を日本語と英語で行う。細かい解説は日本語で行う。後で指導する本文の新出語句の予習も含む。宿題の英文のリピート。	先生の問いに対して、用意してきた答えを言う。その後、先生の質問に英語で答える。先生の読む英文をリピート。	英語と日本語(文法解説)	L&S
テープによる復	テープを聞かせた後、その	先生の質問のヒント	英語と日	L, W,

習・発展練習	内容について Do you think...?と生徒に聞く。そしてその理由を日本語で書く。	があるプリントを参照にしながらテープを聴いて、先生の質問に答える。	本語(理由を聞く)	S
ペアワークによる発展練習	生徒に、パートナーに聞く英語の質問をリピートさせ、その質問をパートナーに聞いてその答えを書かせる。	リピートした英語をパートナーに投げかけ、答えを書く	英語と日本語(活動の指示、文法解説)	L, W, S
スモールトークを応用した発展練習	一人の生徒を指名して、その子が作った質問をクラスに与えさせる	生徒の出した質問に答える	英語と日本語(活動の指示と指示)	L&S
前課の本文の復習	数枚の絵を黒板に貼りながら、その絵について質問し、前課の本文について質問する	先生の話を読みながら、質問に答える	英語	L&S
新しい本文に入る	数枚の絵を黒板に貼りながら、その絵について質問し足り解説したりして、本文の導入にする	先生の話を読みながら、質問に答える	英語と日本語(意味)	L&S
新出語句の練習	新しい本文の新出語句をフラッシュカードで発音を説明。	フラッシュカードのスペリングを見て発音を聞いてまねて発音する。	英語と日本語(指示と文法)	L, S & R
テープによる本文と新出語句の練習	テープをかける。	教科書を見ながらテープを聞き内容を理解する。その後本文と新出語句をリピートする。	-	L, S & R
教員による本文と新出語句の練習	本文と新出語句を発音し、生徒にリピートさせる。rの発音指導。	教科書を見ながら先生の発音を聞き内容を理解する。その後本文と新出	英語と日本語(文法)	L, S & R

		語句をリピートする。		
本文暗記指導 (1)	ペアで本文を暗記するように指示。期間巡視でアドバイスをする。	ペアになって、暗記の練習をする。お互いにできていないところを教えあう。	英語	L,S&R
本文暗記指導 (2)	Read, look up and say.を指導する	本文を見て、顔を上げ、本文を言う。	英語	R&S
おわり	次回の指示と挨拶	先生の指示を聞いた後、終わりの挨拶をする	英語	L&S

#### 補遺 J J先生の授業

活動	教員の活動	生徒の活動	教員言語	領域
Warm-up ゲーム(ビンゴ)活動と日常についての英問英答	What s the date today?などと日常の質問をする。	質問に答える	英語	L&S
ゲーム(ビンゴ)活動(単語)	people などの単語の意味を確認	質問に答える	英語	L&S
歌を歌う活動	歌の指示とほめる言葉など	歌を歌う	英語	L&S
ペア活動(自由に)	活動の指示	ペアでやりとりをする。	英語	L&S
発表活動(教室の前に出てペア活動)	発表ペアの指名とサポート	ペアで発表	英語	L&S
定着のための練習(英問英答)	現在完了の経験 have you ever ...?の質問をし、文構造の理解の確認と指導	先生の質問に答え、構造の復習。	英語	L&S
ペア活動(自由に)	発表ペアの指名とサポート	ペアでやりとりをする。	英語	L&S
教科書の内容(復習)	教科書を開き、CD を聞いてくり返す指示	テープを聞いてリピート	英語	L&R

教科書の内容の口頭練習(生徒の発表)	教科書の対話の発表の指示と評価	ペアで発表	英語	L&R
教科書の内容に関する発展練習	教科書の対話の内容に関する発展活動の指示	ペアで発表	英語	L&S
教科書の内容に関する英問英答	教科書の内容に関する生徒への質問	質問に答える。	英語	L&S
次回の連絡	次の授業の連絡。		英語	L&S

### 補遺 K : K 先生の授業

活動	教師の活動	生徒の活動	教員言語	領域
復習(1)	宿題(和訳)の解答提示と採点の指示	採点に関する質問をしながら採点	英語	R(ただし訳)
復習(2)	前時のテキストモデル音読と復唱の指示	指示に従がい音読	英語	S
復習(3)	前時のテキストの逐語訳 語句の説明 文法の説明 指示語の解説	教師の説明を聞く	すべて日本語	R G
本時の授業(1)	パラグラフごとに音読してから和訳することを指示 文法説明 訳の確認 語句の補足説明	音読と訳	英語	R G
本時の授業(2)	テープに吹き込まれた英問を聞いて質問に答えるよう指示 生徒の答えの訂正 文法補足説明	英問に英語で答える	英語と日本語(文法解説)	L&S

ま と め ( 1 )	本時のテキストのテープを聞くよう指示 まとめの質問	テープを聞いた後で教師の質問( 問 )に答える	日本語	L , R
まとめ( 2 )	新出語彙の練習：教師の音読の後に生徒の復唱の指示 意味の確認の質問	教師のモデル発音に続き発音練習 意味を伝える	英語と日本語	S
次の授業の準備	テープに続き音読練習の指示	テープに続き音読	日本語	S

補遺 L: L先生の授業

活動	教師の活動	生徒の活動	教員言語	領域
始まりの挨拶	礼	礼		
口頭による前時の復習	前時の内容を英語で要約	聴解	英語	L
本時の授業( 1 )	テキストを読みながら口頭で内容理解のための英語による QA 終了後テープを聴かせる	教科書を見ながら質問に答える	英語と日本語	L&S
本時の授業( 2 )	日本語による訳読( 質問は英語による QA とほぼ同じ ) 一文の訳読後テープを流す 訳の要求 文構造, 語彙, 文法説明 指示語に関する質問	質問に答える テープを聞く 訳や表現を書く	日本語	R
本時の授業( 3 )	チャンク単位で範読しながら生徒に復唱を指示 語の発音やリンキングの注意 shadowing をするよう促	復唱 聴解, shadowing	英語と日本語( 発音の仕方の説明 )	L

	しテープを聴かせる			
本時の授業 (4)	重要表現, 構文を使った 和文英訳(3題)の指示 語順, 語の用法の解説 スペリングの注意 文法解説	和文英訳をする	日本語	W
本時の授業 (5)	shadowing をするよう促 しテープを聴かせるの指 示 一文を暗記するよう指示 暗記文の復唱を指示	聴解, shadowing 一文の暗記 復唱	英語と日 本語	L, R, S
まとめ	本時の概要と学習内容の 意義を口頭でまとめる	聴解	英語	L
終わり	終了のあいさつ		英語	

#### 補遺 M: M先生の授業

活動	教師の活動	生徒の活動	教員言語	領域
始まりの挨拶	Good morning. など	あいさつに答える	英語	L&S
口頭による 本時の導入 (1) (本文概要)	登場人物の紹介と質問 (人物の絵を黒板に貼 り, 年齢を推測させる質 問をする)	英語の聴解 質問に答える	英語	L&S
口頭による 本時の導入 (2) (本文概要)	登場人物が訪ねた場所の 説明(地図を張る)/語・ 句・文の説明とリピート (全体 個人)の指示	英語の聴解 質問に答える 単語・短文を復唱	英語と時 折日本語	L&S
口頭による 本時の導入 (3) (本文概要)	登場人物の行動の理由を 説明(黒板に図示)/語・ 句・文の説明と復唱(全 体 個人)の指示	英語の聴解 質問に答える 単語・短文を復唱	英語と時 折日本語	L&S



口頭による 本時の導入 (4) (テキスト の写 真 使 用)	テキストの写真に関する 質問と説明 単語の意味解説	写真を見ながら 英語の聴解 質問に答える	英語	L&S
本時の授業 (1)	文構造, 語彙, 発音, 文 法指導などを含む訳読	質問に答える(訳 す)	英語と日 本語	R
本時の授業 (2)	文, 語, 語句の範読と復 唱の指示 個別発音の注意 Buzz reading とその後の 個人読みの指示	教師の後につい て復唱 立って Buzz Reading	英語と日 本語	R
本時の授業 (3)	本文内容質問のプリント 配布し, 解答を書くよう に指示 口頭の QA による答えの 確認 語彙・文法解説	答えを書く 質問に答える	英語と日 本語	L, W, S
本時の授業 (4)	空所を設けたプリントに よる本文の音読指導 ペアによる音読指導と発 表指示	空所を埋めなが ら本文の音読 ペアで音読	英語と日 本語	R
口頭による 本時の復習 (本文概 要)	本文概要を口頭で生徒に 復唱させる 口頭練習用プリント配布 本文概要の口頭練習指示 (黒板の絵と地図を利用) ペアによる概要の口頭練 習と発表指示	ペアで本文概要 を述べる練習 発表する	英語と日 本語	S
おわり	終了の挨拶		英語	L

補遺 N: N先生の授業

活動	教師の活動	生徒の活動	教員言語	領域
復習	テキストの音読 進度の説明	リスニング	英語と日本語,	L
本時の授業	本文1行ずつの説明と関連質問 説明に含まれる活動 訳 文の構造説明 語彙の説明 動詞の活用 慣用表現	質問に対する応答	テキストの本文以外は日本語	G Voc. R(translation)

補遺 O:O 先生の授業

活動	教師の活動	生徒の活動	教員言語	領域
始まりの挨拶	教科書を開けるよう指示	指示を聞く	英語	L
導入(1)	背景知識の確認のための質問	質問に答える	英語	L&S
導入(2)	新しい課のテキストのIntroduction音読 背景説明 内容理解の質問 語句の説明	先生の問いに答える	英語と日本語	L&S .
本時の授業(1)	新出語の音読と生徒の復唱指示	復唱	英語と日本語	S
本時の授業(2)	パラグラフに番号を付けながら本文テープを聞かせる	パラグラフに番号を付けながら本文テープを聞く	英語	L
本時の授業(3)	内容理解のための英語による質問 補足的な内容説明	内容理解の質問に英語と日本語で答える	英語と日本語	L, R, S

	訳の要求 指示語に関する質問 語彙の解説 本時の文法説明 要文法事項を含む英文の 音読と復唱の指示 111	訳す 日本語で答える  要文法事項を含 む英文の復唱		
まとめ(1)	教師のチャンクを用いた 音読の後に復唱の指示	復唱	英語と日 本語(活 動の指 示, 文法 解説)	L, W, S
まとめ(2)	内容に関する発展的質問	質問に答える	英語と日 本語	R
まとめ(3)	音読の指示  宿題の指示と終わりの挨拶	本時のテキスト 音読	英語	S

補遺 P：P先生の授業

活動の種類	教員の活動	生徒の活動(言語)
導入	1. プリントで新出単語を讀 ませて意味を確認。	1. 教師の後について読み, 指名 され意味を言う。
本文の導入 (内容把握)	2. 教科書の新出単語と本文 のテープを流す。単語の意 味を与える。	2. 教科書を見ながらテープを 聴く。
本文理解(和 訳)	3. 本文を音読させる。 4. 文法解説をしながら1文 ずつの訳させ, 指導する。	3. 音読練習をする。 4. 当てられたら答える。教師の 和訳と文法解説を聞く。
テープ	5. テープをかける	5. テープを聴く
プリント指 導	6. 生徒を指名しながら, 文 法指導。	6. 教師の質問に答える。教師の 解説を聞く。

	プリントの文を読む。 英作文を指導する	プリントの文を読む。 指名されて英作文をする。
--	------------------------	----------------------------

補遺 Q: Q先生の授業

活動の種類	教員(AET&JT)の活動(言語)	生徒の活動(言語)
開始 復習	1. 開始のあいさつ 2. 前時に提出のプリントを返却する 3. プリントの内容に基づいて質問する(JT) 4. モデル対話をする。(JT&AET) 5. 対話に関連した質問をする。(JT は日本語でも補足する)	1. 開始のあいさつをする 2. 教師から受け取る 3. 答える 4. 聞く 5. 指名された生徒が質問に答える
本時の導入 練習 ( Exercise 1)	6. Work sheet を配布しながら活動の指示をする 7. 指名し正解を言わせる。(JT は日本語で補足する) 8. 板書して説明する。( AET による, JT が日本語で補足する ) 9. 空所補充を続ける指示をする 10. モデル対話をする(JT & AET による ) 11. ペアの対話練習の指示をする。(JT&AET は机間巡視する) 12. 着席させる 13. 1組の volunteer を募りデモを行わせる 14. 褒めた後シールを渡す	6. 聞きながら空所を埋める 7. 答える 8. 聞く 9. 空所補充を続ける 10. 聞く 11. 席を離れ, ペアの相手を求めて対話練習を開始する 12. 自分の席に戻る 13. 前に出てデモをする 14. クラスが拍手する

(Exercise 2)	<p>15 . 別な1組の volunteer を募りデモを行わせる</p> <p>16 . 褒めた後,シールを渡す</p> <p>17 . Work sheet の基づく活動の説明をする</p> <p>18 . モデル対話をする。(適宜,JT が語句の意味を日本語で質問しながら確認する)</p> <p>19 . ペアでの対話練習を指示する。(話す相手を替える指示をする)</p> <p>20 . Volunteer を募りデモをさせる</p>	<p>15 . 前に出てデモをする</p> <p>16 . クラスが拍手する</p> <p>17 . 指示に従って答えを書く</p> <p>18 . 聞きながら,質問に答える</p> <p>19 . 席を離れて,ペアを探して対話練習を開始する。(パートナーを3回替える)</p> <p>20 . 前に出てデモをする</p>
(Exercise 3)	<p>21 . 褒めた後シールを渡す</p> <p>22 . 新しいプリントを配布して活動を指示する。(板書する)</p> <p>23 . 内容の説明(JT が日本語と英語で行う,AET が補足する)</p> <p>24 . プリントを提出させる</p> <p>25 . 終了のあいさつをする</p>	<p>21 . シールを受け取り席に戻る</p> <p>22 . 答えを記入する</p> <p>23 . プリントの該当箇所を書き込む</p> <p>24 . 各自,前に出て手渡す</p> <p>25 . 終了のあいさつをする</p>
まとめ 終了		

補遺 R: R先生の授業

活動の種類	教員(AET&JT)の活動(言語)	生徒の活動(言語)
開始 復習	<p>1 . 開始のあいさつ</p> <p>2 . キーワードを板書する</p> <p>3 . 口頭による作文の指示をする(指名)</p> <p>4 . 宿題の該当頁を開かせ答えを確認する(指名)</p>	<p>1 . 開始のあいさつをする</p> <p>2 . 板書を見る</p> <p>3 . 答える</p> <p>4 . 各自の答えを言う</p>

<p>本時の導入 (Exercise 1)</p>	<p>5 . キーセンテンスの応用発展練習をさせる ( expansion drill ) 。 ( 語句等説明を挿入 )</p> <p>6 . 正しい文を復唱させる</p> <p>7 . 活動の指示をする ( 前時のモデルダイアログに基づいた設問 )</p> <p>8 . 問題の質問文を指名し読ませ, 別な生徒に答えさせる。 ( 発音・イントネーションについての説明。JT は適宜限的に日本語で補足説明 )</p> <p>9 . 重要表現に関して板書をしながら説明する。 ( JT は適宜日本語で補足説明 )</p> <p>10 . キーセンテンスを基に代入, 発展を行う。生徒を指名</p> <p>11 . 活動の指示をする。</p>	<p>5 . 指名された生徒が質問, それに応じて別な生徒が答える</p> <p>6 . 復唱する</p> <p>7 . 指名された生徒がテキストの設問の指示文 ( 英語 ) を音読する</p> <p>8 . 指名された生徒は読み, 他の生徒が答える</p> <p>9 . ノートを取りながら聞く</p> <p>10 . 指名された生徒が答える</p>
<p>練習 (Exercise 2)</p>	<p>12 . 各自でテキストの設問に答えるように指示する。</p> <p>13 . 単語の意味を生徒に質問する。確認する。</p> <p>14 . AET と JT で完成したダイアログを読む。</p> <p>15 . 2 人を指名してダイアログを言わせる。</p> <p>16 . 2 人の発音, 言い方等に注意を与える。</p> <p>17 . 第 1 番目の volunteer2 名に対話させる。</p> <p>18 . 第 2 番目の volunteer2</p>	<p>11 . 指名された生徒がテキストの設問の指示文 ( 英語 ) を音読する</p> <p>12 . 生徒は答えをノートに書き込む。 ( 2 分 ) ( AET &amp; JT は 机間巡視する )</p> <p>13 . 日本語で答える。</p> <p>14 . 生徒は聞く</p> <p>15 . 指名された生徒が読む。</p> <p>16 . 指摘されたように言い直す。他の生徒は聞いている</p> <p>17 . 他の生徒は聞いている</p>

<p>発音練習 (Jazz chants)</p>	<p>名に対話させる。(適宜,AET は生徒の対話の語句について説明する)</p> <p>19 . CD を流す</p> <p>20 . 発音上の解説をしながら質問する</p> <p>21 . CD について歌うことを指示する</p> <p>22 . フレーズ毎に復唱することを指示する</p> <p>23 . 語彙の意味を確認する。指名する(JT が質問する)</p> <p>24 . 活動の指示をする</p> <p>25 . 指名して答え合わせ</p>	<p>18 . 他の生徒は聞いている</p> <p>19 . CD を聞く</p> <p>20 . 答える</p> <p>21 . Jazz Chants を一斉に歌う</p> <p>22 . 復唱する</p> <p>23 . 日本語で答える</p> <p>24 . 個別に学習する。(1分)</p>
<p>(Work sheet)</p>	<p>26 . 発音の注意をしながら反復させる</p> <p>27 . CD を流す</p> <p>28 . キーセンテンスを反復させる</p> <p>29 . CD の教材をペアで行わせる (AET &amp; JT は机間巡視する)</p>	<p>25 . 答える</p> <p>26 . 復唱する</p> <p>27 . CD を聞く</p> <p>28 . 復唱する</p> <p>29 . ペアでの練習をする</p>
<p>(Pair work)</p>	<p>30 . Volunteer を募り,ペアでの対話をさせる。(AET が発音上の注意を与える)</p> <p>31 . Work sheet の内容について T or F で質問する</p>	<p>30 . Volunteer 以外の生徒は聞く</p> <p>31 . 答える</p>
<p>(内容確認)</p> <p>まとめ</p>	<p>32 . 本時での学習内容のまとめをする。適宜,質問する(AET &amp; JT がそれぞれ質問する)</p> <p>33 . 終了のあいさつをする</p>	<p>32 . 答える</p> <p>33 . 終了のあいさつをする</p>
<p>終了</p>		

補遺 S